

平成19年度 研究プロジェクトチーム報告書

学校カウンセリングの進め方

—児童生徒の発達段階に応じた効果的なカウンセリングの実践的研究—

奈良県立教育研究所

目 次

I	はじめに	1
II	研究目的	1
III	研究方法	1
IV	研究内容及び結果	1
1	学校カウンセリング	1
(1)	学校カウンセリングの定義	1
(2)	学校カウンセリングの歴史	2
(3)	学校カウンセリングの必要性	2
(4)	教育相談研究プロジェクトの歩みと方向性	3
(5)	学校カウンセリングの進め方	4
2	小学校・中学校・高等学校における実践的研究	5
(1)	小学校における取組	5
(2)	中学校における取組	11
(3)	高等学校における取組	16
V	今後の展望	22
	参考文献	24

学校カウンセリングの進め方

－児童生徒の発達段階に応じた効果的なカウンセリングの実践的研究－

研究プロジェクトチーム

I はじめに

学校は、児童生徒が個々の成長を目指し、将来的な展望をもって学習を継続する場である。指導内容は、学習者の発達に照らして精査されたものであり、学習効果を上げるためには、個に応じた指導と集団を育てる教育が意図的、計画的に推進されなければならない。一人一人を大切にしたい個に応じた指導は、個々人の学び方の違いや個性を充分検討しながら指導者の細かな配慮を加味し進められるものである。学校・学級に対する不適応や友人関係の問題で悩んでいる目の前の子どもたちにとって、日常的な学習意欲の向上を図るための心理教育的援助が必要である。教員が学習者の立場に立って指導法を考え、カウンセリングマインド（カウンセリングの心構え・姿勢）を根底に一人一人にきめ細やかにかかわることで、意図する学習効果を上げることができるのである。さらに、グループや学級集団等の集団を育てることを目的とした学校カウンセリングを推進することで、個と集団が相補的に高まりを見せると考える。ここでは、学校という場の中で、日々成長しようと歩み続ける児童生徒に対して、心理教育的援助を中心とした学校カウンセリングの進め方について論述する。

II 研究目的

学校カウンセリングの効果的な協働体制の在り方を探り、いじめ、不登校などの未然防止、早期対応を意図した発達段階に応じた効果的なカウンセリングの進め方を追究する。

III 研究方法

- (1) 学校カウンセリングの先行研究および理論研究
- (2) 小学校における学校カウンセリングの実践的研究
- (3) 中学校における学校カウンセリングの実践的研究
- (4) 高等学校における学校カウンセリングの実践的研究
- (5) 学校カウンセリングの課題の検討

IV 研究内容及び結果

1 学校カウンセリング

(1) 学校カウンセリングの定義

学校教育においては、教師と児童生徒及び児童生徒相互の望ましい人間関係を育てることで、児童生徒の成長発達を促進することができる。そのためには、人間関係形成能力の向上を意図した教育的アプローチが必要となる。「傾聴」「受容」「共感」を基本姿勢にしながらも、積極的に安心・信頼できる人間関係を育てる学校カウンセリングを思考していきたいと考える。

「学校カウンセリングとは、児童生徒が学校生活を送るプロセスで出会うであろう諸問題の解決を援助する人間関係である。」(國分1999) 学校現場においては人間関係が複雑かつ多様に絡み合い、それ故に希薄化したり空洞化したりする中で、様々な問題事象が表面化している。友人関係の中で悩みを抱え、ストレスを増幅する児童生徒も多い。豊かな人間関係を構築することは、児童生徒の心理的安定を図ることであり、学習意欲を増大させることにもなる。学校カウンセリングは、学校教育のあらゆる場面で、すべての児童生徒を対象に、個々人の人格の発達を援助する目的で行われるものである。学校現場の抱える問題解決は勿論、児童生徒の人間関係をより豊かにしていくことで、問題行動の未然防止につなげていくことができるのである。さらに、児童生徒に直接かかわる教職員が、学校カウンセリングの理論と技能を習得し、心理教育的援助を施すならば、学校は安心できる場となり、信頼できる人間関係が築かれ、より魅力ある学びの場となるのである。

(2) 学校カウンセリングの歴史

学校カウンセリングは、学校という教育の場で行われるカウンセリングである。旧文部省の生徒指導の手引き（1965）には、生徒指導の一方法として「教育相談」が位置付けられた。

また、生徒指導資料集「中学校におけるカウンセリングの進め方」（文部省1972）や「学校における教育相談の考え方・進め方」（文部省1990）において、学校の中での効果的なカウンセリングの方向性が示されてきた。日本における学校カウンセリングの歴史を、佐藤（2007）は、次の4期に分けて示している。各期の説明は、佐藤の論考を要約したものである。

ア 第一期 萌芽期（昭和30年代初期）

自主的に研修を受けた教師やカウンセリングに関心のある者が学校でカウンセリングを行った。専門機関における理論と技法がそのまま導入されていた。ロジャースの非指示的カウンセリングの研修会が全国で開催され、教師も参加していた。

イ 第二期 停滞期（昭和30年代後半から昭和40年代）

第一期の反省、また反動としてカウンセリングは1%の問題をもつ子どものみを対象とするものではなく、99%の問題のない子どもも対象とすべきであるとして、「いつでも、どこでも、だれでも」カウンセリングの対象にしなければならないと主張された。それまでのガイダンスや指導との違いが明確にされないまま推移していった。

ウ 第三期 反省期（昭和50年代から平成の初期）

教育を目的とする学校に、専門の治療機関でつくられた理論と実際がそのまま移入されたことへの批判と反省の時期である。学校は教育指導を大きな目標としているのに対して、カウンセリングは自我の開放に重点を置く。教育指導と治療機能との対立の観点から分化と統合の議論となった。分化としての考えは、学校におけるカウンセリングは教師でなく、専門家が当たるのがよいとするものであり、統合では、学校の教育機能の中に、または生徒指導の中にカウンセリングを位置づけ、教師がこれにあたるという考え方である。

エ 第四期 分化期（平成7年以降）

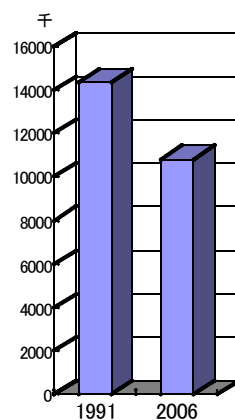
この年に、文科省の「スクールカウンセラー活用調査研究委託事業」が開始され、カウンセラーが試験的に配置された。また、平成13年度からは、「スクールカウンセラー活用事業補助」が実施された。外部の専門家による学校カウンセリングは、学校現場からの要望というよりも、文科省のリードによるところが大きい。学校におけるカウンセリングは、現在、外部から派遣された臨床心理士などの専門家と教師カウンセラーが担っている。後者は、学級担任、教育相談担当教諭や生徒指導担当の教諭、養護教諭などを指している。

このように、日本における学校カウンセリングは試行錯誤の中で半世紀にわたって展開されてきた。現在、奈良県におけるスクールカウンセラーの配置率は、公立中学校において43%である。週1回の勤務となっている心の専門家に、学校におけるあらゆる問題の解決を任せるのは無理である。また、学校の教育相談体制を考えても、充分整備されたとは言い難く、今後は、教員による学校カウンセリングが、日常の教育活動に定着されていくような取組が望まれる。

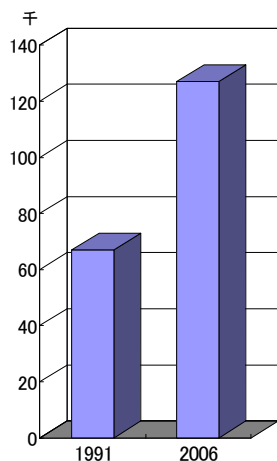
(3) 学校カウンセリングの必要性

児童生徒の学力向上を目指した指導は、個々の悩みの解決と学習意欲の向上を基本にして人間関係を豊かにする取組から始めることが肝要である。

文部科学省の「学校基本調査」に基づく報告「生徒指導上の諸問題の現状」（2007）によると、平成18年度に30日以上欠席した小・中学校の児童生徒数は12万6894人（前年度比3.8%増）であった。平成13年度をピークにして年々減少傾向にあった不登校児童生徒数は、再び微増に転じたのである。とりわけ、中学校では35人に一人の割合となり、平成3年度以降



■ 図1 全児童生徒数



■ 図2 不登校児童生徒数

の中学校の不登校出現率では最高値となった。また、不登校児童生徒の8割は中学生であり、小学校6年生と中学1年生の不登校児童生徒数を比較すると約3倍に増加する。図1に示すように、この15年間で児童生徒数が四分の三に減少する中で、不登校児童生徒数は図2のように約2倍に増えている。

現在の学校現場は、このような不登校児童生徒をはじめとして、いじめで悩み苦しむ子、無気力・無関心で意欲の感じられない子、他者とのコミュニケーションがうまくできない子、携帯電話等を介したネット犯罪にまきこまれてしまう子、多発する事件や事故で傷付き心のケアを必要とする子、家庭でDVや虐待を受けている子、発達障害などで特別な支援を必要とする子など多様な心にかかわる問題を抱える子が存在する。子どもたち自身が、これらの問題に立ち向かい解決していくことは、自立に向かう成長として重要なことであるが、周囲の大人の適切な援助とかかわりが必要不可欠である。学校関係者は、個々の問題に迅速に対応し、児童生徒が安心して学習に取り組むことができるように、学校カウンセリングを充実させていく必要がある。

(4) 教育相談研究プロジェクトの歩みと方向性

学校現場では、さまざまな問題の未然防止を視野に入れた心理教育的な取組が必要である。また、現在起こっている事象においては、早期対応が望まれるところであり、そこでは、適切な生徒指導と教育相談体制の充実が重要課題となる。

当研究所においては、教育相談体制の充実に向けて研究プロジェクトチームを組み、実践的研究を進めてきた。平成14年度から平成16年度においては、「子どもの心をつかむ教育相談の在り方—組織的な支援体制の構築に向けて—」をテーマに研究を進め、その都度報告書にまとめてきた。ここでは、教育相談が校内でよりよく機能していくための要件として次の7点が示されている。

- ア 教育相談担当の組織上の位置付けの必要性
- イ 校内における連携の重要性（教員同士や教員とスクールカウンセラーなど）
- ウ 教育相談担当者の役割の共通理解と全教職員での協力体制
- エ 校内外での専門的知識や方法論の研修機会の確保と教職員の資質向上
- オ 保護者、専門機関等の連携
- カ 校内におけるコーディネーターの人材養成
- キ 相談室の設置

また、ここでは、一人一人の児童生徒の問題解決に向けて、チーム援助システムの構築が不可欠であることも実証されてきた。チーム援助の機能としては、コラボレーション（協働）が思考されており、専門性の異なる者が対話により互いの仕事や役割を理解し合いチームを組み、双方向の協力をし合うことで援助効果をあげてきた。また、個人を援助するために必要な専門家や専門機関との協働体制を構築したり、その体制のもとで組織内の人々が効果的に活動できるように調整するコーディネーション（調整）としての機能も大切にしてきた。さらには、カウンセラーが子どもへの接し方に悩む教員等の問題解決に向けて援助するコンサルテーション（援助介入）もチーム援助システムに組み込んできた。学校における組織的な支援体制においては、教員によるカウンセリングやガイダンスをより円滑に進めるために、このようなコラボレーション・コーディネーション・コンサルテーションの機能を十分に検討し、援助効果をあげていく取組を報告してきたのである。

さらに、平成17・18年度においては、「開発的な教育相談の在り方—児童生徒の発達段階に応じた効果的な指導法の研究—」を進めてきた。児童生徒の問題行動の発生を減少させていくためには、事後対応だけでは不十分であることを踏まえ、問題行動を未然に防ぐための効果的な指導として「開発的な教育相談」を思考してきた。開発的な教育相談をより効果的に進めていくためには、子どもたちの実態に即して具体的な心理教育的援助が必要である。自己理解や他者理解を深め、人間関係を円滑にしていくために、構成的グループエンカウンターエクササイズを意図的計画的に授業に

導入したり、自己のストレスに視点を当てたストレスマネジメント教育を行ったりすることで、児童生徒の学校生活をより豊かにし、問題行動の未然防止に寄与してきた。また、児童生徒の実態把握を意図して「たのしい学校生活を送るためのアンケート (Q-U)」(監修 田上不二夫 著者 河村茂雄)を用いたり、豊かな人間関係構築に必要なスキルを補うためにソーシャルスキルトレーニングやアサーショントレーニングを適切に学習活動の中に組み込んできたのである。

「教育相談とは、一般には、幼児・児童・生徒・学生の教育上の問題に関し、本人、保護者または教師などと面接し、相談・指導・助言を行うこととされる。」(鶴養1992)とりわけ、相談というコミュニケーションを考えると、話すこと・聞くことの言語活動を双方向に行う行為として捉えることができる。相談者が自己の抱えている問題を相手に伝えて、一方的に指導・助言を受ける場合は、教育相談の場ではない。問題行動の解決に向けた早期相談はもとより、開発的な教育相談により、あらゆる問題行動の未然防止を意図した実践的研究を進めてきたのである。

以上のように当研究所においては、過去5年間、教育相談体制の構築と開発的教育相談についてプロジェクト研究を進めてきた。今年度からは、それらの研究成果を踏まえううえで、個と集団に心理教育的援助を行う学校カウンセリングについての実践的研究を進めることとした。

(5) 学校カウンセリングの進め方

学校カウンセリングは、これまで述べてきたように、人間の心理や発達理論に基づく対人援助活動であり、児童生徒一人一人の成長を促進し対人関係の改善や社会的適応性を向上させる取組である。ここでは、小学校、中学校、高等学校の教職員が中心となって、児童生徒の人格形成や様々な問題解決に向けて、具体的にかつ有効に学校カウンセリングを進めていきたいと考える。進めるに当たっては、次の5項目を大切にしていく。

- ア 実態把握・・・・・・・・児童生徒の実態を的確に把握し、どんな力を付ける必要があるのか心理教育的な査定(アセスメント)をする。
- イ 個に応じた取組・・・・一人一人の児童生徒の課題を明確にして、具体的な心理教育的援助(サイコエデュケーション)を行う。
- ウ 集団を高める取組・・・・学級や学校の集団としての課題を明確にして、具体的な心理教育的援助(サイコエデュケーション)を行う。
- エ 連携と協働・・・・・・・・学校カウンセリングを進めるに当たっては、より効果的に行うために教職員や関係機関と必要な連携と協働を行う。一人で抱え込まずチーム援助を考え、協働体制を組んで学校カウンセリングを行う。その際に、個や集団の中にある能力や人的資源を有効に活用する。
- オ 評価・・・・・・・・児童生徒の振り返り場面における気づきを、次の学習に活かす。

学校現場における児童生徒の実態を的確に把握し、豊かな人間関係を構築できるように心理教育的援助を行う。児童生徒は、それぞれの生育史の中で、多様な生活習慣を身に付けてきている。改善の必要な習慣であれば、毅然とした指導で改善を迫りたい。その際、より効果的な指導を考えると、当該児童生徒と教員との関係性を重視する必要がある。学校カウンセリングは、安心と信頼の関係によって為し得られるものである。児童生徒を取り巻く環境も生活習慣も、よりよい方向に変えていくことが教育現場における課題であり、そのことが問題行動の未然防止につながる。豊かな人間関係の構築と必要なライフスキルをターゲットとして学校カウンセリングを進めていきたい。

以上のことを踏まえて、小学校、中学校、高等学校において、個と集団の相補的な成長発達を意図した学校カウンセリングの取組を行った。以下に報告する。

2 小学校・中学校・高等学校における実践的研究

学校カウンセリングの進め方

－児童生徒の発達段階に応じた効果的なカウンセリングの実践的研究－

(1) 小学校における取組

下市町立阿知賀小学校 教諭 熊谷 啓子
kumatani keiko

ア はじめに

本校は、奈良県のほぼ中央部、清流吉野川南岸に位置する児童数102名の小学校である。校区では、昔から米作りや花作りが盛んで、登下校時も田畑の様子で季節を感じる自然に恵まれた環境にある。

児童は、全体的に明るく素直である。1学年1学級で、クラス替えがなく、小学校6年間を同じ人間関係の中で過ごすことになる。このような変化の少ない人間関係の中で生活する子どもたちには、あえて言葉に出さなくても分かってもらえる、また、一度定着した価値観がなかなか置き換えられないという傾向が見られる。それゆえ、人間関係を築く上で小規模校の難しさを感じてきた。そこで、「子ども一人一人が輝く 笑顔の素敵な4年生」を目指し、集団を高める取組、個を生かす取組、更には学びを生かす取組を実践することを通して、どうすれば「ふれあいのある人間関係」が構築されるのか研究を進めたい。

イ 目指す子どもの姿

今年度、担任している4年生は、男子17名女子5名の22名の学級である。発表したり運動したりすることを好む児童が多く、活気ある学級である。ただ、エネルギーをもてあましてトラブルを起こしてしまったり、あるいは攻撃されるのを避けるために自分を押しさえて必要以上に友だちとかかわろうとしなかったりする児童の存在が気になっていた。

これらの行動の原因は、人間関係を構築する能力が希薄になってきていることが考えられる。コミュニケーションがうまくいかない経験が続くと、学校に対して不適應感を強めやすく、不登校やいじめなどの問題に発展することがあったり、自分に対して自信がなくなり自己否定感を強めていったりすることにもなる。そのようなことにならないように、学級全体及び個人に対して人間関係を構築する力を高める援助をすることが大切であると考えた。

子どもたちは、学校生活、特に学級を中心とした人間関係の中で、共感能力や社会性をはぐくんでいく。そこで、目指す子どもの姿を図1のように設定し、よりよい人間関係を築き、学級全体の雰囲気をつまやかにするとともに、子ども一人一人が輝くことを目指した。また、学級で身に付けた人間関係を構築する力を生かす場として、学校行事や地域とのふれあい活動を生かすこととした。

(図1 研究構想図参照)



写真1 下市町立阿知賀小学校

ウ 取組

(ア) 「集団」を高める取組

学級でのトラブルの多くが、「気持ちをうまく表現できていない」「対人関係の処理がうまくできていない」などに起因している現状を考え、対人関係のスキルアップを目指して、サイコエデュケーション(國分2001)を取り入れた。

a いいこと賞「友達を見つめ、自分を知る」

ちょっとしたいいことを友達に認められる体験を通じ自己肯定感を高めたいと考え、毎日、帰りの会で、友達の「いいこと賞」を見付け発表する機会を設けた。友達のいいところを探して書き留めておくなど、相手に関心を寄せるというプロセスを大切にしたい。取組を進める中で、友達のいいところを積極的に見つけようとする様子が見られるようになったり、自分のちょっとしたいいことを友達に認められた児童が、自分の行動に自信をもてたりするようになってきた。そして、もっといいことをしようという気持ちが芽生え、お互いのいいところを認め合える、そんな児童の姿が見られるようになった。

b 歌のハーモニーは心のハーモニー「歌を通して心に響きを」

音楽を通じて心の交流を図ることを目標に、朝の会、帰りの会に毎日歌う機会をつくった。一人一人の違った歌声を合わせることは大変なことである。みんなで歌声を響き合わせるためには、注意深く聴くことが大切である。

歌い始めたころは、ただ自分勝手に歌うだけであったが、「みんなの心を一つにしよう」と声をかけ続け、徐々に友達の声を聴いて合わそうとする子どもが出てきた。みんなで納得できるまで精一杯歌い、子どもたちの心も一つになっていった。上達してくると自信もつき、以前から交流をしてきた地域の福祉施設のおじいさんやおばあさんにも歌を聞いてもらいたいとの子どもたちからの提案で、施設を訪問することになった。歌を通して、学級の友達だけでなく出会った多くの人々とコミュニケーションを図ることができた。



写真2 全員合唱

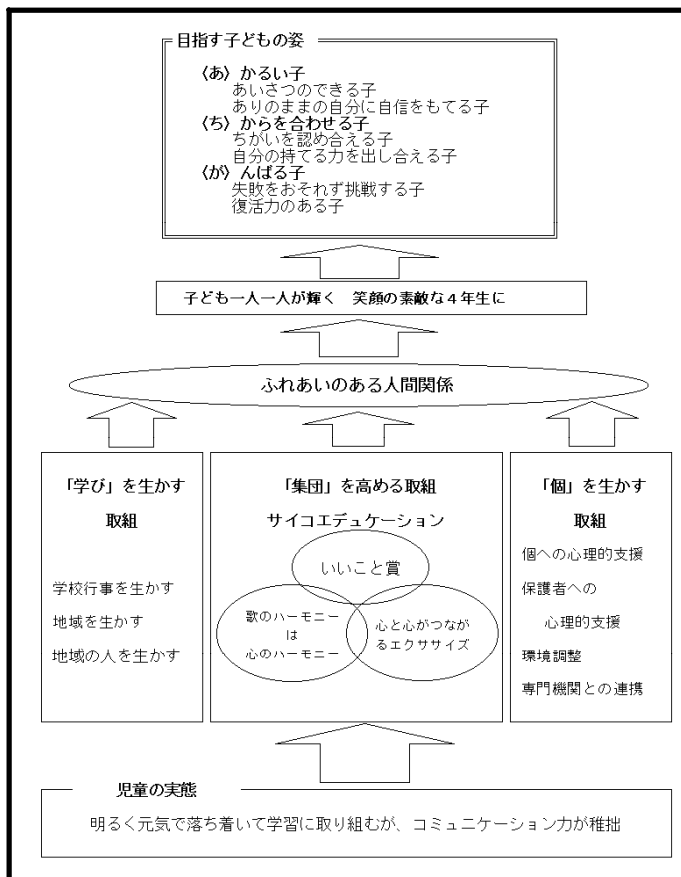


図1 研究構想図

c 心と心がつながるエクササイズ「集団のまとまりを目指して」

心のリレーションを深めたいと、構成的グループエンカウンターエクササイズを取り入れた。保護者にも関心を寄せてもらいたいと、エクササイズを取り入れた学級活動の授業参観の機会を設けた。また、保護者を対象とした学級懇談会でも取り入れ、保護者間の人間関係づくりにも役立てた。児童相互、教員と児童、保護者相互、教員と保護者が一体となることにより、より一層学級集団のつながりが深まるだろうと考えた。

エクササイズを重ねていくと、今までほとんどかわりをもつことがなかった児童同士がかかわるなど、子どもたちの日常生活にも変化が見られるようになった。

子どもたちのエクササイズ後の感想

- ・ 友達はやさしいんだなあと思ったし、仲間全員で取り組むことは大切だなあと思った。
- ・ やる前は心が一つになっていなかったけど、やった後はみんなの心が一つになった。

「なにか22人の心が一つになった気分がした。心ってすごい。」

表1 エクササイズの年間計画

学期	ねらい	活動	内容
1学期	人間関係を深めよう	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな握手 (受容) ・この指とまれ (自己・他者理解) ・1分間スピーチ (他者理解) 	<ul style="list-style-type: none"> ・指先で握手(無言)から言葉をかけ合いながら片手握手までだんだんむずかしくなるスタイルの握手を行う。 ・「好きな○○」などテーマを決めて、同じ考えの人同士でグループをつくり、その理由を伝え合う。 ・日直の司会で2人組になり、今日のテーマにそって1分間ずつスピーチする。
2学期	お互いに知り合おう	<ul style="list-style-type: none"> ・4つの窓 (自己・他者理解) ・二人で描こう (自己・他者理解) ・無人島体験 <授業参観> ・自慢のわが子 <学級懇談会> 	<ul style="list-style-type: none"> ・「好きな○○」などテーマごとに4つの選択肢を用意、同じものを選んだ人同士で理由を伝え合う。 ・声を出さず、1枚の画用紙に2人で協力して絵を描く。完成した絵を見て話し合い題名をつける。 ・友だちの多様な考え方に気付き、お互いを認め合える人間関係を築く。 ・わが子のいいところを2人組で伝え合う。順番に自分のパートナーの子どものいいところを紹介する。
3学期	あたたかい人間関係をはぐくもう	<ul style="list-style-type: none"> ・ふわふわ言葉とチクチク言葉 (ソーシャルスキル) 	<ul style="list-style-type: none"> ・言われて悲しかった言葉とうれしかった言葉を黒板に書き出し、気持ちを発表する。言葉が引き起こす感情に気付く。

出典 (國分康孝監修 エンカウンターで学級がかわるショートエクササイズ集 図書文化)
(「 エンカウンターで学級がかわるショートエクササイズ集part2 「)

保護者会では、子どものマイナス面ばかりに目を向けがちな保護者が多いことを踏まえ、わが子の良いところを話し合うエクササイズを取り入れた。最初は話しにくそうにしていた保護者も、徐々に本音で話すことができるようになり、子どもの良いところを一生懸命話していた姿が印象的だった。この話合いの後、積極的に子どもにかかわろうとする保護者が増え、子どもたちへのかかわり方も変わっていったことが、子どもたちの声からうかがえた。

学級懇談会でのエクササイズ後の保護者の感想

- ・他のお母さんの子どもに対する本音が聞けて、本当に参考になりました。
- ・なんでも子どもがしたいと思ったことは、やらせてみるってことが大事だと思いました。
- ・最近、自分の事にかまけていて子どもの事をよく見ていなかったり、話もちゃんと聴けていなかったり、本当にさぼり気味だったと反省しました。子どもの笑顔探しから始めたいと思います。いろいろ気付かせていただいた懇談会でした。

(4) 「個」を生かす取組

「集団」を高める取組を進める中で、問題を抱える子どもの居場所をマネジメントすることの大切さを感じた。問題をもつ子どもの成長エネルギーを回復させていくには、個別に信頼関係をつくっていくことはもちろんだが、子どもが所属する集団に受け入れられるようにしていくことも必要である。

a Aさんへの取組

Aさんは、周囲とのコミュニケーションがうまくとれず、思い通りにいかないと、急に怒りだしたり友だちをたたいたりするのでトラブルになることがあった。話したいことがある時は一生懸命伝えようとするが、自分の話したいことだけを話し、友だちがそのことについて聞いても答えることはなかった。視線が合うことも少ない。そこで、まず人の話をしっかり聞くように指導したが、一時的に収まるだけだった。保護者からも、Aさんが周りの子どもより今まで受けてきたこと(くつくし、自転車へのいたずら等)についての訴えがあった。そこで、Aさんを受けとめ支える心

理的な支援が必要であると考え取り組んだ。(表2)

表2 Aさんへの取組

① Aさんの行動理解と保護者への心理的支援
② 二次的な問題を起こさせないための取組
③ 専門機関との連携

① Aさんの行動理解と保護者への心理的支援

前学級担任や保護者から話を聞き、Aさんの実態把握につとめた。できるだけ誉めることを中心に対応し、よくないことをしたときは、きっぱりやめるよう話すか、時には少し場をかえ、落ち着かせてから話をした。そして、Aさんのこだわりをある程度受け入れるよう努めた。

また、保護者がAさんのことで不安を抱えているように感じたので、連絡を密にとり、気持ちを受け止めるように心がけた。

② 二次的な問題を起こさせないための取組

言葉よりも先に手が出るため、周りから注意され、自己を否定的に捉えているように感じる。そこで、二次的な問題を起こさせないために、Aさんの得意なことを認め、優れた面を伸ばすように心がけた。「集団」を高める取組での「心と心をつなぐエクササイズ」では、徐々に自己肯定感を高めていくことができたように感じる。

③ 専門機関との連携

Aさんへの対応については、相談機関でアドバイスを受け、校内特別支援委員会(校長 教頭 教務主任 特別支援コーディネーター 養護教諭 学級担任)や職員会議においても、Aさんの実態について報告し、取組について検討した。

b Bさんへの取組

Bさんは、活気のある学級の中では、真面目でおとなしいという印象だった。休み時間は教室の中にいることが多く、外に遊びに行くことはほとんどなかった。また、特定の友だちとは話すが、自分から積極的に話しかけたり、進んで手を挙げ発表したりすることもなかった。どことなく自信のない感じで、給食もほんのわずかしか食べない。自分からは、必要以上のはたらきかけや行動をしないので、援助が必要であると感じた。(表3)

表3 Bさんへの取組

① Bさんの実態把握と行動理解
② 二次的な問題を起こさせないための取組
③ 養護教諭と環境調整

① Bさんの実態把握と行動理解

Bさんは、思いついたかのように時々教卓のそばに来て、自分の読んだ本や家で飼っている動物の話をした。そんな時はBさんの話をよく聞き、興味のあることや夢中になっていることを理解するようにした。保護者からも、家庭での過ごし方やBさんが関心を寄せていることなどについて聞いて、学校ではそのことを話題にした。Bさんは、その日の出来事を日記に書いて持ってくるので、それを通してやりとりをした。

② 二次的な問題を起こさせないための取組

一番気になるのは、Bさんが決まった友だちとしかかかわりをもととしないことだった。グループ学習や当番活動には参加するが、学級担任の勧めで外に遊びに行っただとしてもすぐにもどってきてしまう。そこで、できるだけ休み時間も共に過ごすようにし、たくさんの友だちとかかわるように働きかけていった。1学期中頃、今まで必要以上に自分の意見を言わなかったBさんが、休み時間に友だちにしてもらって嬉しかったことを、「いいこと賞」で話したことがあった。その頃に、学級での発言も増えていった。

③ 養護教諭と環境調整

学校では少ししか食べないBさんだが、家庭では好き嫌いなく食事をしているようだ。そこで、保護者の意見も聞きながら養護教諭と相談し対応を検討した。初めは食べる量を少し減らしても残さないようにし、少しずつ増やしていこうとBさんとも話し合った。Bさんの学級での発言が増えるとともに、徐々に食事の量も増え、おかわりもするようになった。

(ウ) 「学び」を生かす取組

学級を中心に、「集団」と「個」への取組を進めてきたが、児童数が少ないため、限られた人とのかわりになってしまう。そこで、学級で学んだことを生かす場として、学校行事や地域とのかわりを活用していくことにした。

a 学校行事を生かす

本校では、幅広い人間関係を築くことを目標に、異年齢集団による活動（縦割り班活動）を取り入れている。主な活動は、表4に示したとおりである。

表4 異年齢集団による活動

縦割りでの取組	活動内容
ランチルームでの給食	12班のグループで給食当番を行い、食事を共にする。教職員も一週間ごとに各班をまわって食事をする。
花いっぱい大作戦	育てたい花を班で話し合い、前期は「運動会を花いっぱいにしてよう」、後期は「卒業式と入学式を花いっぱいにしてよう」と活動を行う。
秋の遠足	秋の遠足は、徒歩で実施。次の3コースを年ごとに変えて行う。 (飛鳥めぐり・下市広橋コース・大淀大阿太コース)

縦割り班での活動を円滑に進めるため、4年生の子どもたちには

○ 上の学年の子どもに自分の思いを正しく伝える。

○ 下の学年の子どもに思いを正しく受け止める。

という目標を設定し、活動に参加させた。子どもたちは、学級での学びを基に、生き生きと活動を進めていった。

b 地域と地域の人を生かす

保護者や地域の方々は、「うちの学校」という意識をもっている人が多く、学校に対して協力的である。子どもたちは、ゲストティーチャーとして来校された地域の人から、昔の暮らしや地域で盛んに行われている花作りについての話を聞いたり、農業体験をさせてもらったりしている。話を聞く子どもたちの眼差しは、いつも真剣そのものである。

また、校区にある老人福祉施設との交流も深めている。学期に1回、交流を計画し、レクリエーションや歌などでふれあう機会を設けている。「また来てや。待ってるからな。」と涙ながらに見送ってくださるおじいさんやおばあさんたちとの出会いは、子どもたちの心にあたたかいものを育てたようだ。このように、子どもたちが地域の良さに気づき、地域の人にあたたかさに触れる中で、人間関係を構築する力が強くなっていけばと思う。

老人福祉施設との交流後の感想

- ・初めはきんちょうしていたけれど、一緒に折り紙をしていたらだんだんなれてきて、話ことができました。おばあさんが折り方を教えてくれました。
- ・ぼくは、おじいさんにいっぱい話しかけました。「こうして、こうやったらできますよ。」と言うと笑ってくれました。次の訪問で、おじいさんに会うのが楽しみです。
- ・わたしたちが歌った歌を聞いて、おじいさんは、喜んでくれたのか泣いていました。

エ 研究の成果

(ア) 子どもたちの変化

集団の高まりとともに、善悪の判断をして行動することができる子どもが増えてきた。また、自分から友達にかかわろうとする場面を見ることが多くなった。遅くなっている友達に「今みんな○

○してんで。」と声をかける子どもや、友達同士がもめていたら問題の解決を図ろうとする子どもも現れるなど、子どもたちの社会性が育ってきたようである。

周りとのコミュニケーションがうまくとれなかったAさんやBさんも、他の子どもたちと接する機会が増えてきた。何より楽しそうな笑い声を聞くことが多くなったことが、一番うれしいことである。

(イ) 学級全体の変化

学級集団を高めようとサイコエデュケーションを取り入れた。友だちとかかわる中で、ありのままの自分の姿を見つめることができてきたようだ。また、自分の周りにも目を向けることができるようになり、友だちの変化にも気付くようになってきた。

傷つくことを恐れ、集団の中で自分を出せずにそれなりの自分の居場所を探しているようにも見えた子どもたちが、友だちの良いところにも目を向け、お互いに支え合うことのすばらしさに気付いたようである。

(ウ) 保護者の変化

安心して子どもたちへの教育活動に取り組んでいくためには、保護者との人間関係づくりが大切だと感じ、学級懇談会で構成的グループエンカウンターエクササイズを行った。エクササイズ後の保護者の感想にもあったように、本音で話し合うことができ笑顔の多い保護者会になった。教員と保護者だけでなく、保護者同士の人間関係づくりにもなり、その中の話合いを通して、我が子の見方も変化した。これからも保護者と正しく理解し合うなかで、生き生きとした子どもの成長を願って共に取り組んでいきたい。

(エ) 学級担任自身の変化

研究テーマである効果的なカウンセリングの実践的研究を進めていく上で、まず子どもの実態を正しく受けとめることの大切さを感じた。そして、問題を抱える子どもにかかわって取組を進める中で、学級の子ども一人一人を今までと違う目で見ることができ、今まで気が付いていなかった子ども的一面を見ることができるようになった。これまでの自分自身を振り返ると、自己開示できない児童に対して配慮せずに発言を求めたり、問題を抱えた子どもに対して対処療法的な指導を行っていることがあった。この取組を通して、レッテルをはるのではなく、子どものありのままの姿を受けとめながら一人一人に応じた援助を行うことの大切さを再確認した。

オ 今後の課題

(ア) 連携の大切さ

すべての児童を対象とする学校カウンセリングにおいて、個と集団の双方を高めしていくためには、学級担任だけではなく、教員同士が情報交換をしチームとして支援していくことが大切である。さらに、学校や家庭、地域社会との連携を必要とするときもあれば、時には専門機関との連携を必要とするときもある。何が一番子どもたちのためになるのかを考え、連携を図っていくことが大切である。

(イ) 継続した研修

学級担任には、一人一人の児童の自己実現の援助、よりよい人間関係づくりの援助、一人一人の児童理解と評価という仕事がある。それを実現するためには、いいものはいい、悪いものは悪いという毅然とした姿勢をとり、誠実に向き合い、強い信頼関係を築き、そして、児童同士の信頼関係を築き上げることが大切である。

そのためには、教員自身が人間関係のプロでなければならないと感じた。子ども自身の伸びる力を引き出していけるよう、自己研鑽、つまり自分の感性を磨き続けることが大切である。

カ おわりに

小学校6年間での子どもの成長は著しい。低学年、中学年、高学年と考えても、援助の方法は全く違う。また、子ども一人一人の発達にも個人差がある。この両方の視点を大切にしながら、子どもがどうしたらスムーズに発達段階における課題を乗り越えていけるかを考え、これからも学校カウンセリングの取組を進めていきたい。

(2) 中学校における取組

学校カウンセリングの進め方

－児童生徒の発達段階に応じた効果的なカウンセリングの実践的研究－

斑鳩町立斑鳩中学校 養護教諭 藤嶋 祥子
Fuzishima Sachiko

ア はじめに

斑鳩町は奈良県の北西部に位置し、世界文化遺産である法隆寺を校区に含んでおり、古くからの町並みが残る一方、住宅地やマンションも多い。本校は斑鳩町の北部に位置する、今年で創立60周年を迎えた生徒数464人の中規模校である。生徒は比較的落ち着いた状態であり、部活動や体育大会、合唱音楽会などの学校行事に積極的に参加している。

一方、様々な理由から学校を休みがちになる生徒もいる。本校の長期欠席者生徒数（30日以上）は全校生徒の約3%を占め、決して少なくない状況がここ数年続いている。また、保健室を頻繁に訪れる生徒も多く、本校の学校目標である「健やかで元気な生徒」の育成のためには、それぞれの生徒の状況に応じた援助が必要である。

そこで、学級担任と養護教諭、スクールカウンセラー（以下SCと記す）が役割を分担した上で、教育相談係が中心になりながら生徒全体にかかわり、生徒の問題行動の未然防止を目指した。

イ 取組の実際

学級担任と養護教諭、SCの基本的な役割分担については、表1に示した。

表1 援助対象者と役割分担

援助者	援助対象と援助内容
学級担任	学級の生徒全員への個別援助と集団への援助
養護教諭	保健室来室生徒を中心とした個別援助
S C	相談室を中心とした個別援助

ただし、学級担任と養護教諭、SCのそれぞれが決まったかかわりをするだけでなく、開発的にも問題解決的にもかかわるようにした。具体的な取組は以下のとおりである。

(ア) 学級担任が中心となって進める取組

学級担任を中心に、構成的グループエンカウターのエクササイズを実施した。1学期は主に学級の間関係性を深めるため、他者理解や自己理解、学級づくりという内容を中心に実施した。また、2学期は、主にクラスの凝集性を高めることを目指して、ワークシートなどを利用した活動をおこなった。実施したエクササイズの代表的な内容は、表2に示した。実施する内容については、学年で話し合いをもち、統一して全クラスが同じエクササイズを実施した学年もあれば、クラスの実態と課題からクラスごとに実施するエクササイズを替えた学年もあった。

構成的グループエンカウターは気軽に実施できるものが多く、多くの生徒が楽しんで参加した。

表2 2年生の実施したエクササイズの例

	エクササイズ名	ねらい
1学期	私はだれでしょう あなたに会えて本当によかった コロコロトークング	自己理解・他者理解や自己開示・相互理解を中心に、新しい学級集団への適応を図る。
2学期	続・なぞの宝島 はやぶさ殺人事件 私はだれでしょう ～さんは～な人	コミュニケーション能力を高める。 集団の凝集性を高める。 (班活動を中心に継続的に実施)

私は～です		
エクササイズは、國分康孝監修	エンカウンターで学級が変わるPart2中学校編	図書文化
國分康孝監修	エンカウンターで学級が変わる小学校編	図書文化
諸富祥彦監修	自己表現ワークシート	図書文化 を参照

次に、本校では1・2学期の2回、学級担任が生徒全員と個別に面談する教育相談週間を実施している。具体的な実施時期については運営委員会で決定され、そのねらいは表3に示したとおりである。

表3 教育相談週間のねらい

教育相談週間のねらい
1 生徒と話をする時間をもつことによって、その内面に迫り、信頼関係を築く一つの手立てとする。
2 生徒が自分の気持ちを言語化することにより、自分に直面している問題を把握し、教員がその問題を解決していけるよう援助する。
3 進路や適応の状況を把握し、充実した学校生活が過ごせるよう助言する。

1学期は6月に全学年統一の教育相談週間を設定し、主に放課後の時間を利用して実施した。ここでは、生徒一人一人との信頼関係を築くことを第一の目的とした。事前アンケートは各学年・学級の状況に応じて使用した。面談で得られた情報のうち、共通理解の必要な内容については、学年会議で検討した。

2学期は11月を教育相談月間として設定し、学年の実態に応じ実施することにした。この時期は、行事による放課後の活動も多かったため、実施できた学年と時間をとるのが難しい学年があった。

「教育相談があるからそのときに話そう」と心積もりする生徒もおり、自ら進んで希望しなくても、学級担任が話を聞いてくれる時間が確保されていることに安心する生徒がいるのも事実である。生徒個人に目を向け細かな援助ができる機会であり、生徒と教員のコミュニケーションの場として大切な時間となっている。

(イ) 保健室での取組

保健室には様々な訴えをもった生徒が来室する。打撲、捻挫といった外科的症状や、頭痛や腹痛など内科的症状を訴える生徒だけでなく、ただなんとなく来室している生徒も多い。このような生徒の来室理由は、ソファーに寝転びたい、身長を測りたい、保健室が落ち着く場所だから、ちょっと話を聞いてほしい、教室に居場所がないから、友人がいないなど深刻なものを含め様々である。その来室頻度も、ほぼ休み時間ごとに、1日1回程度、特定教科の前後に、ごくたまにと、生徒によって異なっている。

身体症状に現れる心のサインを見逃さず的確に捉えることができるように、保健室来室者カードを利用しながら健康相談活動を実施している。保健室に来ることが目的になっている生徒には、その様子の変化を見逃さないよう注意している。

また、自分から話をしにくい生徒には来室カードをゆっくり書くようにしたり、休養する場合にはワークシートに記入させたりして内面の理解に努めた。学級担任及び他の教員にはタイムリーに情報を発信するようにし、お互いの共通理解のもと協力しそれぞれの立場に沿った対応ができるよう連携を心がけた。

SCは時間に余裕のあるときは保健室に来て、来室者との交流を図っている。特に気になる生徒への対応を相談したり、その生徒とかかわれるよう時間帯を工夫したりしながら来室予定を組むなど、係としての立場を生かしながら連携している。保健室でSCと気軽に話せる機会があったためか、2学期中ごろより清掃後の休み時間などに相談室を数人で訪れ、相談をする生徒も出てきた。SCが気軽に相談できる人として生徒が認識するのに役立った。

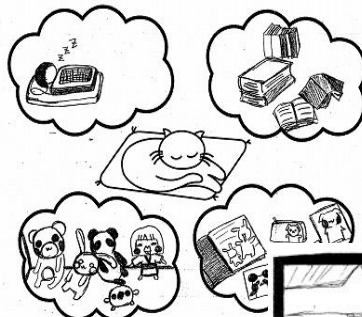


写真1 保健室

保健室登校をしている生徒もいる。2学期から週に1日程度の登校であるが、保健室へ来た後、別室（相談室）で学習するというスタイルが継続している。特別支援学級の生徒との交流や、クラスメイトとの交流もできつつある。

保健室入室者カード

11月 8(火)	3年 組	氏名	()
入室時間 10時 45分	休養・授業中 ()	限・教科 ()	給食・清掃 ()
退室時間	廊下 ()	放課後・行事 ()	
あなたの今の状態は？			
<input checked="" type="checkbox"/> 1. 気がだるい <input type="checkbox"/> 2. 両方ともしんどい <input type="checkbox"/> 3. 1. 気持ちがいらいら <input type="checkbox"/> 4. 2. 両方ともしんどい			
入室した主な理由に、その他の症状に○をつけましょう			
<input type="checkbox"/> 0. 頭痛 <input type="checkbox"/> 1. 胃・腹痛 <input type="checkbox"/> 2. 下痢 <input type="checkbox"/> 3. かげほげ状(せき・のど痛・鼻水・悪寒・発熱) <input type="checkbox"/> 4. 気分不良・悪酔い <input type="checkbox"/> 5. 体がだるい・しんどい <input type="checkbox"/> 6. ぼんやり <input type="checkbox"/> 7. 嘔吐 <input type="checkbox"/> 8. 頭痛 <input type="checkbox"/> 9. めまい <input type="checkbox"/> 10. 生体痛 <input type="checkbox"/> 11. イライラする <input type="checkbox"/> 12. 集中力があがらない <input type="checkbox"/> 13. なんとなくとなく <input type="checkbox"/> 14. 寝てしまいたい <input type="checkbox"/> 15. その他 ()			
発いつ頃からですか？			
<input type="checkbox"/> 0. 今朝から <input type="checkbox"/> 1. 登校中 <input type="checkbox"/> 2. 登校後 () 限・教科 () <input type="checkbox"/> 3. 前日から <input type="checkbox"/> 4. 2, 3日前夜中→それ以前から			
なぜ、体の調子が悪くなったと思えますか？			
<input type="checkbox"/> 0. 睡眠不足 <input type="checkbox"/> 1. 不規則な生活 <input type="checkbox"/> 2. 朝食の量 <input type="checkbox"/> 3. 食事不規則 <input type="checkbox"/> 4. 運動不規則 <input type="checkbox"/> 5. 疲れ <input type="checkbox"/> 6. 冷え <input type="checkbox"/> 7. 暑さ <input type="checkbox"/> 8. 運動中・後 () 運動不足 <input type="checkbox"/> 9. 運動不足 <input type="checkbox"/> 10. ストレス <input type="checkbox"/> 11. 心配・悩み <input type="checkbox"/> 12. 人間関係 <input type="checkbox"/> 13. 家族 <input type="checkbox"/> 14. 学習不安 <input type="checkbox"/> 15. あせり・不安 <input type="checkbox"/> 16. わからない <input type="checkbox"/> 17. 持病がある <input type="checkbox"/> 18. その他 ()			
次の質問に答えましょう			
昨夜寝た時間(7時:30) 朝起きた時間(7:45) 睡眠時間(7時間 45分) よく眠れましたか(はい・いいえ) 朝食を食べましたか(はい・いいえ) 今朝、うんこをしましたか(はい・いいえ)			
学校は楽しいですか(はい・いいえ) 悩みや気になることはありますか(はい・いいえ)			
希望 0. 休養したい <input checked="" type="checkbox"/> 1. 学習したい <input checked="" type="checkbox"/> 2. 相談したい <input type="checkbox"/> 3. 家がさる <input type="checkbox"/> 4. わからない <input type="checkbox"/> 5. その他 ()			
観察など			
<input type="checkbox"/> 0. 授業継続 <input type="checkbox"/> 1. 休養 () 限 () <input checked="" type="checkbox"/> 2. 学習 <input type="checkbox"/> 3. 相談・指導 <input type="checkbox"/> 4. 経過観察 <input type="checkbox"/> 5. 別室入室 <input type="checkbox"/> 6. 病院受診指示 <input type="checkbox"/> 7. その他 ()			



資料2 ワークシート
安心ワールド



資料3 ワークシート
小さい頃の風景

(ウ) SCの取組

SCは授業のある週に1回（6時間）、年間35回来校している。面談の予約受付は教育相談係の養護教諭が担当している。本校だけでなく町内小・中学校からの相談にも応じている。

生徒・保護者は学級担任もしくは係に希望日時を伝える。調整した上で決定日時を連絡し、本校相談室での面談となる。面談の前には係とSCが打合せをし、終了後はSCからの必要な情報提供を受け、学級担任と係が今後の方針を話し合う。予約が多くなると時間確保が課題となるが、最低限職員室での短時間の打合せは確保するよう努力している。

全校生徒へSCの存在を周知するため、5月の全校集会で、SC本人による自己紹介、相談室の説明、心についての話などがあつた。同時に、生徒向けのスクールカウンセラーだよりと保護者向けの案内文書を配布した。

また、本年度からは、給食の時間にSCが各学級へ行き、教室で一緒に食べる機会を設けた。なかなか相談室へ出向くことが難しい生徒とかかわりをつくるために始めたが、「うちのクラスにはいつ来てくれるの？」など、生徒からの要望もあり全学級で実施するようになった。

スクールカウンセラーだより

平成19年5月7日発行 茨城中学校スクールカウンセラー 牧野 真子

みなさん、はじめまして。今年から茨城中学校の相談室に来ることとなりました。スクールカウンセラーの杉田純子（まつうら じゅんこ）です。ふだんは兵庫県に在任していて、中学校ではスクールカウンセラーとして、病院（小児科）では臨床心理士として働いています。

スクールカウンセラーとは、学校で専門に色々な悩みや問題の相談にのり、一緒に考え答えを見つけていくお手伝いをする人のことです。生徒だけでなく、保護者の方からの相談も受け付けています。

給食やクラブ活動、友人関係など、毎日の生活で悩みはつきものです。「モヤモヤと悩んでいること」や「しんどいなあ、と感じていること」があれば、一人で悩まずぐっぐりと一緒に考えてみませんか？どんな小さなことでもかまわないですよ。一度、相談室のぞいてみませんか？

○相談日 月曜日（午前10時～午後6時）
（基本的に月曜日ですが、変更になる場合もあります。くわしくは、下記の活動予定日を見てください。）

○相談場所 茨城中学校 本館 1階（相談室）

○相談の申込み方法 ①直接、相談室に行ってみる
 ②学校へ電話連絡（TEL: 74-1301）をして申し込み
 ③担任の先生やクラブ顧問の先生に申し込み
 ④保健室の養護先生に申し込み

「一学期の活動予定日」				
5月	7(月)	・ 14(月)	・ 22(金)	・ 29(木)
6月	4(月)	・ 11(月)	・ 18(月)	・ 25(月)
7月	2(月)	・ 9(月)		
8月	相談日は予定されておられません			

※二学期以降の予定については、またお知らせを配布する予定です。

資料4 スクールカウンセラーだより

事前に学級担任と打合せをしてから教室へ行き、気になる生徒の近くに座るよう計画することもあった。給食を一緒にとることで、生徒はSCに親しみがわき、気軽に話しかけていた。時間が許せば給食終了後もそのまま教室で生徒に囲まれている場面も多く見られた。また休み時間に相談室をなげなくのぞく生徒も増えた。SCは、教室の雰囲気や学級担任と生徒の関係、また、学級担任の教室での対応の様子などを観察することができ、その後の相談にも役に立っている。

(エ) 共通理解と協働

取組の冒頭で述べたように、学級担任と養護教諭、SCが、それぞれの立場から、開発的にも問題解決的にも関わるようにしてきた。また、それぞれの取組が個別の援助に終わることなく、全体として多面的に生徒に関わっていけるように、教育相談係である養護教諭が連携の調整をしていくように心がけた。

まず、教育相談週間等で得られる生徒に関する情報のデータベース役を養護教諭が担うことで、

- 保健室来室時に適切な対応がとれる。
- 週一回勤務のSCへ効率よく情報を伝えることができる。

というメリットがあった。また、生徒の中には、保健室で普段と違う一面を見せる者もいる。健康相談活動を実施することによって得られた情報を学級担任、SCへ情報発信することに心がけた。これにより、的確な対応・連携ができるようになった。さらに、SCが清掃時間や給食時間に生徒とかわるようになったことで、SCから生徒の情報がたくさん得られるようになった。SCが感じた生徒の印象を養護教諭が集約し、学級担任に伝えることを大切にされた。

このように情報を共有しながら、必要な場合にはケース会議を実施した。今年度、気になる生徒すべてに対してケース会議を実施することはできなかったが、日常の少しの時間を利用した情報交換を大切にしてきた。

ウ 個に応じた援助

(ア) 頭痛での保健室来室が多いAさん

1学期より頭痛を訴えて来室。特定教科の授業前の来室が続いたので学級担任に連絡し、学年で情報交換した。その結果、Aさんの話を聞きながらなるべく授業を受けさせるようにした。

2学期に入り欠席が続いたので、保護者と学級担任が話し合い、SCとの面談を勧めた。保護者とSCの面談後、学級担任・学年主任・SC・養護教諭での検討会議を実施し今後の方針を確認した。Aさんに対しては、多くの教員が声をかけながら様子を見守り、学年主任や特別支援学級担任、養護教諭が特に気をつけて対応するようにした。学級担任は本人にも対応するが、保護者と連絡を密にし、家庭でのAさんへのやわらかい対応をお願いするようにした。SCは保護者との面談を続け、Aさんとは部活動見学や給食時訪問でかわりをもった。その後、Aさん自らSCとの面談を希望したため実施した。

2学期後半には、時々SOSを出すときもあるが、落ち着いて学校生活が送れるようになった。今後も継続対応が必要であるが、3学期になってからは、保健室来室もなく、SCとの面談の予約もしていない状況である。

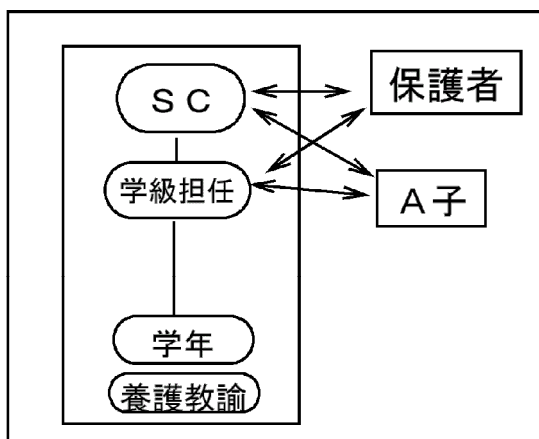


図1 Aさんへのかかわり

(イ) 頭痛や足首痛を訴えるBさん

2学期より保健室への来室が増え始めた。初めは体調不良を訴えていたが、しだいに友人関係の

しんどさを訴えるようになった。

SCが給食時に教室へ行ったときはSCに甘えていたので、心理的な援助が必要と判断し、養護教諭・学級担任、SCで話し合いをもった。

保護者とは別件でSCとの面談が実施されていたので、保護者へは学級担任とSC、Bさんには養護教諭が中心となって対応するようにした。学級担任は教室の中でのBさんの様子を観察しつつ、学級の一人としてのBさんへの対応を継続している。

(ウ) 進路への不安を訴えるCさん

Cさんは保健室へ頻繁に来室する生徒で、一人で来ることは少なく、周りに友人がいることが多い。SCが保健室へ来たときも気軽に話しかけ、休み時間に自分から相談室へ行くようになった。SCが個別の面談を勧めると承諾し、一人相談室へ出かけた。

一対一の面接の中で、Cさんは進路に対する不安などを口にするようになった。友人といるときは不安を感じさせないCさんだが、友人の手前なかなか口に出せない不安を抱えていたようで、SCへ話せたことで、心が軽くなったようだ。

面談後に、「SCからアドバイスをもらった」とうれしそうに報告に来た笑顔が印象に残る。

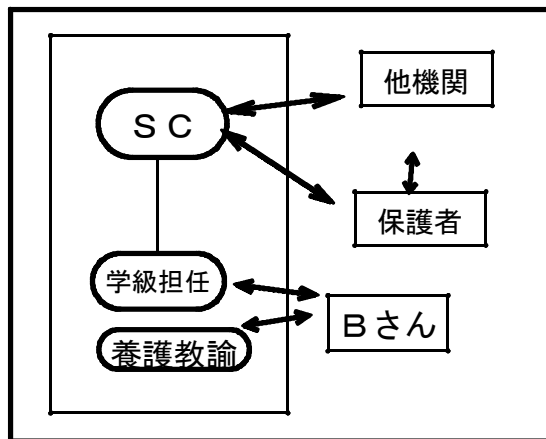


図2 Bさんへのかかわり

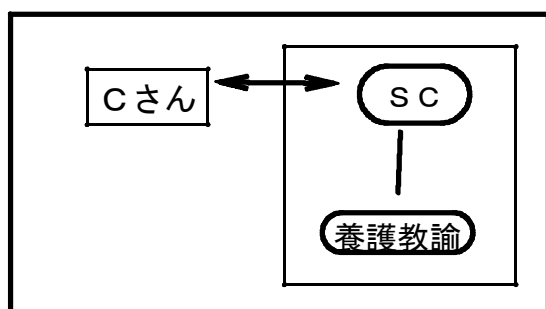


図3 Cさんへのかかわり

エ 研究の成果

学級担任と養護教諭、SCのそれぞれが役割を分担したかかわりをするだけでなく、必要に応じて開発的にも問題解決的にも関わることによって、生徒をいろいろな角度から見ることができた。また、連携をとり、チームとして援助の方法を探ることによって、多面的なアプローチも可能となった。

SCと養護教諭の連携が密にとれたことが本校の教育相談体制には有効であったと思われる。ともすれば二人だけの共通理解になってしまいがちだが、本年度は教育相談係に学年主任が所属していたことで、学年教員との連携がとりやすかった。また、SCが相談室から教室や保健室へ動き出すことによって、普段なかなかサインを出さない生徒を含め多くの生徒とかかわりをもつことができた。SCと生徒とのかかわり方を教員が実際に目にするすることで、SCに対する理解がより深まった。そのためSCへの相談がしやすくなり、連携をスムーズにする効果があった。一方、SCは、生徒の教室での様子を知ることができ、その後の面談に役立てることができた。

オ 今後の課題

教育相談体制ができて、それですべてが解決するわけではない。その生徒に対して何が必要な援助であるかを、SCや教員が連携しながらチームとして考えていかなければならない。必要に応じて体制も変化させることにより、より効果的になっていくのではないかと思う。そのためにも更なる連携が重要である。教員間の連絡を密にするためにも、必要な人に必要な情報が効果的に伝わるような、効率的な情報交換の方法を考えていかなければならない。更に、生徒の出すサインを見逃さないために、個人を見守る姿勢を全職員が確かにしなければならぬ。とりわけ、事例検討会を含めた職員研修を計画的に実施するなど教員個人の資質も向上させつつ、より相談しやすい機能的な体制を目指して今後も日々研鑽していきたい。

カ おわりに

専門家であるSCの力を最大限に引き出すこと、学級担任が生徒に心理教育的にかかわることができるように援助をすることが教育相談係の役割の一つだと思う。SC、学級担任と協力しつつ、様々な悩みの渦中にある中学生への効果的な学校カウンセリングを進めるために、自分自身の力量も更に高めていきたい。

(3) 高等学校における取組

学校カウンセリングの進め方

－児童生徒の発達段階に応じた効果的なカウンセリングの実践的研究－

県立五條高等学校 教諭 生野 悦子

Ikuno Etsuko

ア はじめに

本校は創立110年を越える伝統校である。商業科1クラスと普通科6クラスで構成されている。文武両道を目指し、生徒の募集を行っているが、昨今は、少子化が進んだことや交通の便の問題等から定員を満たすことができず、平成19年度に「五高ルネッサンス」と称して大きな学校改革に着手した。その一環として、単独7時限授業を行って幅広い学びを推進する「まなびの森コース」と部活動を推進し、リーダーシップ性に優れた生徒の育成を目指す「のぞみの丘コース」が設置された。

本校生徒は、五條吉野地域の生徒が全校生徒の約7割を占めており、特に五條市内の生徒は入学当初から友人関係ができていくことが多い。多くの生徒は素直で人なつこく、教員との関係は良好である。約6割の生徒が部活動を行い、約9割の生徒が進学をする。

筆者は今年度新設の「まなびの森コース」を担当し、4月当初は、クラスの特徴を次のようにとらえていた。

- ・素直で生活面において真面目な生徒が多い。
- ・学習に対する高い意欲をもつ生徒と学校生活に目標をもてない生徒の両方が混在している。
- ・対人関係の辛さを訴える生徒が多く、友人関係が希薄である。
- ・自己表現の苦手な生徒が多い。

こうしたことから、自己表現力に乏しい生徒や、集団での適応に問題を抱える生徒への援助が必要であると考えた。

イ 援助の目的と方向性

共に学び合い、育て合いながら学校生活を送っていくためには、自分の考えを素直に出し、相手の個性を認められるような人であることが必要である。そして、学級はそれぞれが楽しく学校生活を送っていけるような安心感のある集団でなくてはならない。さらに、生徒たちは3年間の高校生活を経て自立を求められる世界に出る。3年後には、自己の進路を決定し、援助の少ないであろう新しい世界で自己表現を適切に行い、集団の中での自分を認識してうまく協調していかなければならないのである。

本コースは3年間ほぼ同じメンバーで学校生活を送ることになる。また、他の課程・コースと異なる理念の単独クラスであるため、活動においても自由度が高い。これを上手く利用して学級という集団の中で積極的に自己表現力や社会性を養う活動を行っていきたく考えた。そこで、学級担任を中心として高校生の発達段階に合ったどのような援助ができるのかを探ってみることにした。1年時からの意識的な働きかけによって、生徒一人一人の社会性・学級の親和性の深まりがより期待できる。また、できるだけ周囲の人的援助をうまく生かす方法も模索してみたいと考えた。

学級の特徴から、社会性・自己表現力の育成のためには、集団に向けての心理的援助とともに個人に対する心理的援助を同時に行うことにより、一層の効果が期待できるのではないかと考え、個人と集団を意識して心理教育的援助をしていこうと考えた。

ウ 取組の実際

(ア) 個人に向けての心理教育的援助

一人一人を理解するために…3回の個別面談

表1に示すように学級全員と個別面談を行った。4月・6月の面談及び生徒観察を通して把握した生徒のもつ問題は以下のa～eのように多種多様で、これらに対してより適切に対応していくに

は教職員の連携、すなわち、チームによる援助が必要であると感じた。以下に生徒のもつ問題とチーム援助の実際を示す。

表1 個別面談の時期別目的

実施時期	目的
4月中旬	生徒理解を深めるために一人10分程度行った。本コースを選んだ理由や家庭のことなど、全体的な生徒把握を目的とした。
6月中旬	学級での適応・学習面の問題に焦点を絞って行った。学校生活の様子から生徒それぞれの抱える問題点がぼんやりながら見えてきたころであり、生徒自身も学校生活に慣れてきたころであるので、入学後の現実を目を向けた一歩踏み込んだ面談を目指した。
10月初旬	コース変更の希望及び科目選択を適切に行わせることを目的とした。進路展望や学校生活での目標に照らしてコース変更を行うことができるので、一人一人と時間をかけて話し合いながら、本人にとってよりよい選択ができるように工夫した。

※1 進路資料の提示・具体的な選択肢の提示・必要に応じて保護者との三者面談や進路部長を交えての面談・部活動顧問への相談・複数回の面談

a 友人関係をうまく構築できない

【問題点】目を見て話せない、クラスメートに声をかけられない、密着型の友人関係しかつけれないなどの生徒がいる。本人は悩みとして訴えないが、いじめや不登校につながるきらいがあるという点で問題があると感じる。

【援助】掃除の時間やホームルーム、学校行事等において、生徒相互の関係を構築していく機会を多くした。

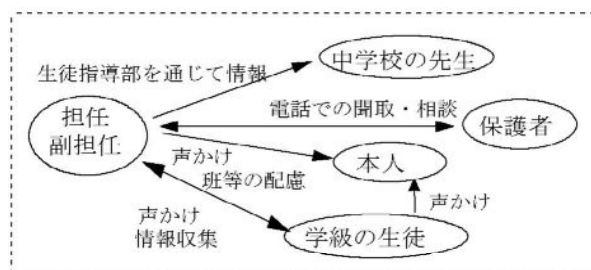


図1 友人関係をうまく構築できない生徒の場合

b 学校生活に目標がもてない

【問題点】類型選択が2年生の後半であること、部活動をしている生徒が少ないことなどから、将来への展望や今の生活での具体的な目標をもてない生徒が少なからずいる。

【援助】長期的な目標ではなく、学校行事を中心に活躍できる場を生み出せるようにした。部活動への参加の奨励を含め、様々な角度から助言した。また、プロジェクト（校内サポート組織）への実態報告、具体的な案の検討を行った。

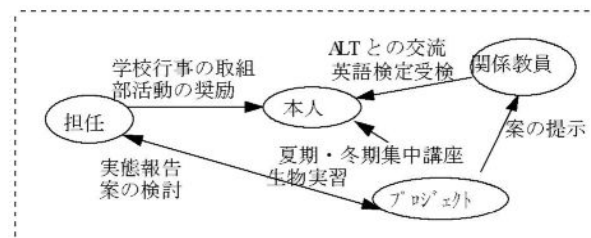


図2 学校生活に目標がもてない生徒の場合

c 学習に意欲がもてない学力に自信がもてない

【問題点】学習への意欲は他の課程・コースに比べて高い傾向にあるが、学習の方法などに悩み、劣等感を抱えてしまう生徒がいる。在籍数が多いので習熟度別の2講座授業を行っているが、そのことで生徒同士に軋轢が生じないか、また、劣等感が助長されないか危惧される。

【援助】進路指導部を中心とする模擬試験実施後の助言・指導、将来設計に役立てるための適性検査や進路別説明会等、長期休業中の学習講座・土曜日の希望者学習会（数学）、随時の各教科補習・再テスト等を行った。

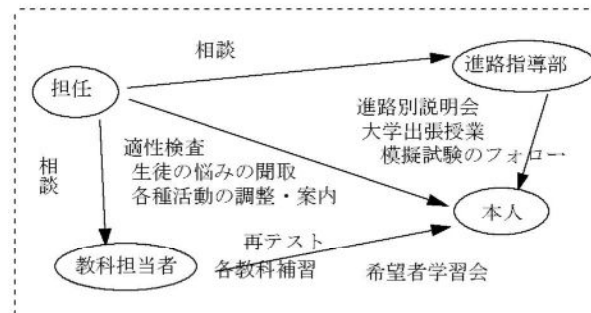


図3 学習に意欲がもてない学力に自信がもてない生徒

d 学習と部活動の両立に苦しむ

【問題点】本コースのみ7時間授業なので、ほぼ毎日遅れて活動することになり、他の部員への気遣いや練習不足を感じている。また、部活動をしている級友が少ないので学級内でも友人関係の面で気遣うことが多い。

【援助】担任から本コースの活動内容を顧問に再度連絡し、理解を求めた。部活動顧問から他の部員への説明、本人への声かけを頻繁に行った。

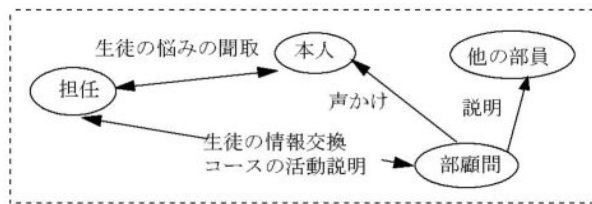


図4 学習と部活動の両立に苦しむ生徒の場合

e 専門的なかわりが必要である

詳細は避けるが、そのケースに応じて保健室、保護者との連携を密にし、対処している。

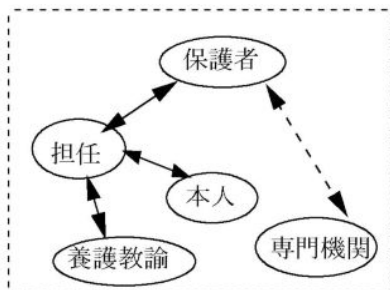


図5 家庭の問題を抱える生徒の場合

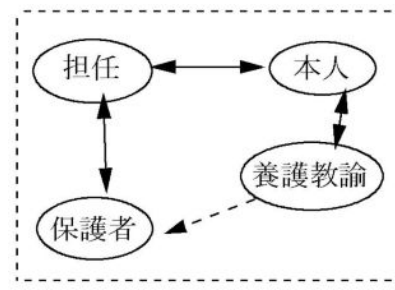
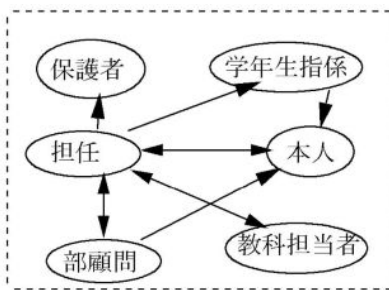


図6 身体の問題を抱える生徒の場合

(イ) 情報収集活動…生徒個別報告用紙

1学期には、一人一人の生徒について関係教員と話をする時機を逸することがあった。チームとして生徒にかかわることのできる教職員集団を目指し、2学期以降は資料1のような個別報告用紙を活用した。関係の教員は意識して生徒を観察し、学級担任が把握していなかった情報も得ることができた。また、そのことをきっかけに生徒についての相談をする機会や生徒への声かけの機会が増えた。

____さんについて気がかりなことがあります。			
____月____日(____)	____時間	目	担当者____
<ul style="list-style-type: none"> ・この日は (遅刻 早退 保健室 その他) ・(欠席が多い 遅刻が多い) ・学級担任と話したいことがある。 			
気づいたこと・感じたことなど			

資料1 生徒個別報告用紙

(ウ) 集団に向けての心理教育的援助

集団に向けての心理教育的援助は、日々の学級経営の中で学校行事をうまく利用しながら継続的に行った。とくに、最初の頃は指導的な助言を多くし、徐々に生徒たちの自主的活動を促していった。ここでは、文化祭と体育大会での取組の様子と学級活動の中で行ったアサーショントレーニングについて記述する。

a 学校行事を中心として

① 種まき期…文化祭準備

個々のコミュニケーション能力を高め、生き生きとした学校生活を送れるようにするためには

9月の文化祭を活用していくことが最も効果的であると考え、7月に次の3点に留意して文化祭について話し合った。

- | |
|---|
| ①全員が参加できること
②やり終えて達成感をもつことのできる内容であること
③高校生としてふさわしい内容であること |
|---|

話し合いの結果、巨大モザイクアート製作に決定した。製作するにあたっては、学級の全体写真を利用し全員が巨大な作品を共同製作することで学級への帰属感が増すこと、生徒が相互に協力し合うことで望ましい友人関係をつくっていくことを主たる目的とした。また、より高い目標を設定することにより、自己への信頼や自信を高めることを期待した。

② 芽生え期…文化祭

夏休み前に分担を決め、8月下旬の登校日に確認すると大半の生徒が多くの作業を残していた。その後、放課後遅くまで作業する日が続いた。なかには、参加意欲の乏しい生徒もいて互いのコミュニケーションがうまくとれない場面も見られた。リーダーシップをとる生徒をサポートしながら学級内の生徒たちの協調性を高めるよう配慮した。文化祭が近づくにつれ、互いを助ける生徒も出てきて、各自の分担を仕上げ、それらをつなぎ合わせて巨大アートができあがるころにはほぼ全員が熱心に取り組むようになっていた。

文化祭当日、朝8時前には生徒全員がそろい、前日の雨で傷んだ部分を早朝から修復して、皆でつり下げる作業を行った。作品の展示が完了すると、歓声が上がり、さわやかな笑顔が見られた。この巨大アート製作をとおして、次の3点を実感することができた。

- | |
|---|
| ①協力することやあきらめないことが大切である
②周囲に支えられている
③自分たちもやればできるのだ |
|---|

その後、自ら話しかけてくることのほとんどなかった生徒たちが、学級担任によく話しかけてくるようになった。また、性別を問わず、生徒同士がよく話をするようになり、学級全体の親和性が一気に高まったように感じた。しかし、一方では、自己表現が上手くできず攻撃的な表現をする生徒、級友批判ばかりする生徒や、依然として黙り込んでしまう生徒の存在が目につくようになってきた。

③ 生長期…体育大会

生徒たちがどれだけ集団の一員として活動する力を付けてきたかを見ることを目的とし、できるだけ生徒主体の活動となるように配慮した。その結果は次のようなものである。

- ・体育大会に向けての話し合いでは時間はかかったが、互いに気持ちを伝え合い選手決定が進んだ。
- ・体育大会の前に、はちまき作りを自主的に行う生徒がいた。また、このはちまきに関して、当日多くの生徒が賞賛し礼を述べていた。
- ・前日に残って団体種目の練習をしていた。
- ・当日、クラス席にほとんどの生徒が残り、級友の出場する競技を観戦、応援した。

この二つの大きな行事を終えた生徒の感想を次に示す。

〈多く出された感想〉

- | |
|---|
| ・団結力のあるクラスでいいクラスだ。
・仲良くやれていると思う。一人一人のコミュニケーションがもっと増えればいいと思う。
・体育大会が終わってまた一段と団結できたと思います。
・このクラスは「やればすごいことをできるクラス」だと思います。このクラスで良かった。 |
|---|

〈この時点での学級の状態をよく表している感想〉

- | |
|--|
| ・自己中人が多いけど、最近はいい感じ。もっと話をしよう。
・最初のころよりは、まとまってきた。 |
|--|

〈問題点を明らかにしている感想〉

- | |
|----------------|
| ・友達関係がうまくいかない。 |
|----------------|

- ・私自身つきあいが悪いので、少し居心地が悪い感じがします。
- ・まだまだみんな好き勝手だと思います。自分も含めてですが、……

b 自分と周囲との関係を考える活動…アサーショントレーニング等

文化祭を契機として、学級担任からコミュニケーションの話をすることが増えた。学校生活を楽しいものとし、3年間の学びを有意義に進めていくためには、学級での支え合う雰囲気づくりが不可欠である。これまでの人間関係の中でうまく他者とつながる方法を身に付けてこなかった生徒に対人関係の在り方をどこかで学ばせる必要があると感じ、表2のようにアサーショントレーニング及び集団への帰属感を高めるためのトレーニングを行った。「アサーショントレーニング」とは、自己も相手も尊重する自己表現を身に付けるトレーニングである。

表2 自分と周囲との関係を考える活動計画と結果

	1回目	2回目
実施時期	9月中旬（文化祭終了後、体育大会前）	10月下旬（体育大会終了後約1ヶ月）
使用時間	LHRの1時間	「総合的な学習の時間」の2時間
目的	自分の気持ちを言葉にして伝えることの重要性を認識させること	①コース変更する生徒の気持ちを理解させること ②集団の一員であることを確認させること
配布物	A4ワークシート3枚（資料2～4）	A4ワークシート3枚（資料6～8）
活動	a 「アサーティブ」「ノンアサーティブ」「攻撃的な言動」について理解し、自分の日ごろの言動を振り返る。 b 演習Ⅰを個別に行う。 c 演習Ⅱを隣席の者同士二人一組で考え、意見をまとめる。	【1時間目】 a 「アサーティブ」「ノンアサーティブ」「攻撃的な言動」について見直し、「非合理的な思い込み」について考える。 b 演習ⅠABを個別に行う。 c 演習ⅠCを隣席の者同士二人一組で考え、意見をまとめる。 【2時間目】 これまでの高校生活を振り返って、「学級でももらったこと」「学級のためにしたこと」を10項目以上書き出し、感想をまとめる。
結果	時間の初めから楽しい雰囲気が進み、演習Ⅱを二人組になってするように指示したところ、全員がすぐに隣席と机を合わせ話し合いを始めた。生徒たちが考えた「アサーティブな言動」（資料4の演習Ⅱ状況①）を分析したのが、下の資料5である。こうした例から、相手に配慮して自分の気持ちを言葉で表現する方法を身に付けてきていると感じた。	ワークシートに取り組みながら、コース変更について生徒と話す時間をもつことができ、コースを変更する生徒への理解が深められた。また2時間目の活動では、「自分が学級の中で助けられている」と考えた生徒や学級への自己の貢献度を改めて考え直している生徒が多くいた。一方では、「自分は存在感がない」とだけ書いている生徒も数名いた。

- ・ごめんなさい。（謝罪）また話し込んでしまうから（理由）できない（断り）。
- ・気持ちはずれいいけど（表現）、一人の方が集中できるから（理由）一人でするよ（断り）。
- ・気持ちはずれいいけど（表現）、他にやらなければならないことがあるから（理由）無理かも知れない。
- ・誘ってくれたのは嬉しいけど（表現）前みたいに進まなかったらお互いにテストで辛い思いをするから（描写）今回はやめておこう。（提案）

資料2 アサーショントレーニング（演習Ⅱ）の生徒の答え 一部

エ 成果と考察

(ア) 個人への取組の成果

個々の生徒の社会性を高めることを目標に生徒への援助活動を行ってきた。その結果、図7（「学校内で次のような友人はいますか。」という同じ質問を7月と10月に行ったアンケートの結果）のように生徒の意識が変容した。「自分の性格上の欠点を忠告してくれる友人」は、文化祭・体育大会等を経て顕著に増えている。集団で取り組む学校行事活動の中で表出した個人の欠点を互いに指摘し合いながら成長していく生徒の姿がうかがえる。また、「勉強で分からないことがあったとき気軽に相談できる友人」・「将来のことについて、何でも話し合うことができる友人」が

わずかではあるが増えたのは、進路指導部やプロジェクト等を中心にあらゆる人的資源を使って、将来の展望がもてるように援助してきたことの成果ではないだろうか。

面談によって得た個人のもつ問題をもとに学級担任が周囲に援助を求めたことにより、効果的なチーム援助ができた。教員同士の情報交換がスムーズに進めば、効果的に生徒への援助ができる。今回、新コースであったため、手探りの状態であらゆるところに援助を求めたことがうまく働き、柔軟な対応ができたのではないかと思う。チーム援助を実現するためには、学級担任は「調整係」という立場を認識し、生徒にかかわるすべてを抱え込まずに援助を適切に求める必要があるだろう。学級では、新しく部活動を始めた生徒、自己の進路展望に沿ってコース変更を希望した生徒等もいて、皆自分なりに模索を続けながら高校生活を送っている。

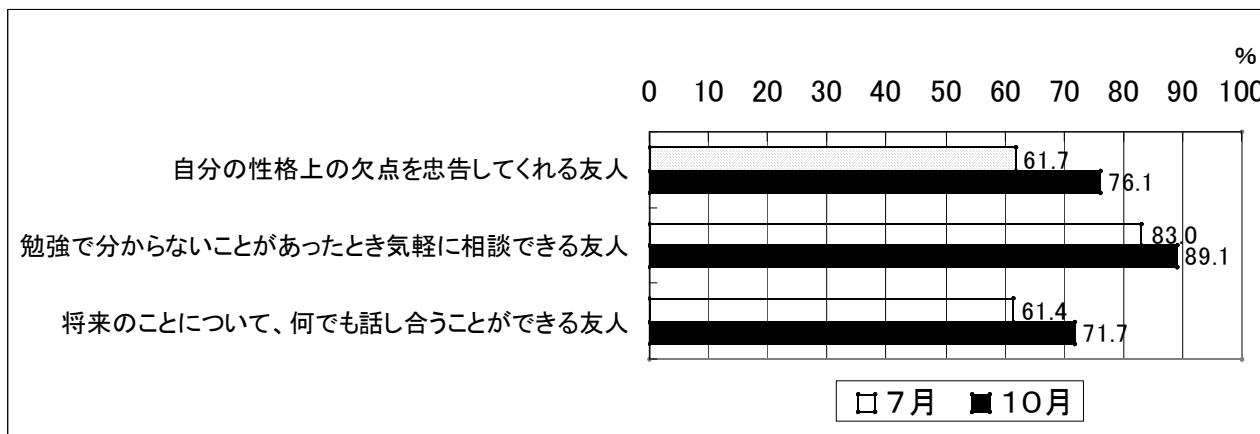


図7 友人に関するアンケートの結果

(イ) 集団への取組の成果

学校行事が最も効果的に個々の能力を高める機会となった。日常生活の中では他者に目を向けた活動をするのが少ない生徒であっても、学校行事活動の体験の中で他者に配慮する行動や他者とのかわり方を身をもって学んでいったと言える。指導的な援助から徐々に自主性を重んじる援助に移行するよう配慮しながら、寄り添った援助活動を行うことによって、生徒に「気づき」が生まれた。また、それと並行してアサーショントレーニング等を取り入れたことによって、他者との望ましい関係確立のための行動を意識化させることができたのではないだろうか。

オ 課題

今後も学級の生徒全員への個別援助を続けていくのはもちろんであるが、家庭のこと・身体のことなど様々な悩みを抱えた生徒に対し、より細かい個別援助をしていかなければならない。そのためには養護教諭の継続的な援助や専門機関との連携による適切な援助ができるよう、校内に教育相談のしっかりとした組織体制を整えていくことが必要である。

また、社会性の育成という視点を忘れることなく、生徒たちが個々に達成感を味わうことのできる行事を計画し、援助していくことが必要であろう。

カ おわりに

学級内には、まだ友人関係形成に不安を感じる生徒や配慮を欠く言動をする生徒がいる。今後も個人面談や日常の声かけの機会を多くするとともに、学級経営の中で心理教育的な手法をうまく展開できるよう自己研修に努めたい。

V 今後の展望

小学校・中学校・高等学校において、児童生徒の発達段階に応じた学校カウンセリングの実践的研究を進めてきた。小学校の学級担任が、学級経営の一環として行った学校カウンセリングでは、関係機関の協働体制と心理教育的援助（サイコエデュケーション）の重要性が見えてきた。また、中学校において、養護教諭がスクールカウンセラーと協働して進めた取組からは、教職員の専門性を生かした連携とチーム援助の重要性が主張された。さらに、高等学校で教職員がチームとなって進めた学校カウンセリングでは、チーム援助を進める学級担任の役割と生徒の自主性を最大限に生かした学校行事の重要性が示された。

1 心理教育（サイコエデュケーション）で集団を高める

学級集団を高めるサイコエデュケーションの取組では、児童一人一人が友達と関わる中で、ありのままの自分の姿を見つめることができた。また、自分の周りの友達にも目を向けられるようになり、友達の変化に気付くようにもなった。傷つくことを恐れ、集団の中で自分を出せずに居場所を探しているようにも見えた子どもたちが、友達の良いところにも目を向け、お互いに支え合うことのすばらしさに気付けた。このように集団を高めるためには、サイコエデュケーションを指導の中に適宜取り入れていく必要がある。

2 保護者会で構成的グループエンカウターのエクササイズを導入

安心して子どもたちへの教育活動に取り組んでいくためには、保護者との人間関係づくりが大切である。学級懇談会で構成的グループエンカウターのエクササイズに取り組むことにより、保護者同士が本音で話し合い、笑顔の多い保護者会になった。教員と保護者だけではなく、保護者同士の人間関係づくりにも学校カウンセリングは有効である。学校教育の根底を支えるものは、このような人と人との信頼関係である。今後も人間関係づくりに有効なエクササイズを、保護者会等に導入していく。

3 学校行事を生かして集団を育てる

集団を育てる学校カウンセリングにおいては、年間計画に位置づけられた学校行事を効果的に活用し、児童生徒個々の能力を高める機会とした。子どもたちは、学校行事に直接かかわり、体験する中で、他者に配慮する行動や他者とのかかわり方を身をもって学ぶことができた。学級担任は、指導的な援助から徐々に自主性を重んじる援助に移行するよう配慮した。さらに、寄り添った援助活動を行うことによって、児童生徒に「気付き」が生まれた。評価の段階では、このように学習者の気付きを大切に、より高次の目標設定をしていきたいものである。

児童生徒に対して、個に応じたきめ細かい心理教育的援助を推進することと合わせて、集団での体験活動を、人間関係形成能力を高める取組として進めていく。

4 学校・家庭・地域・関係機関による協働体制

すべての児童を対象とする学校カウンセリングにおいては、個と集団の両方が高まっていくための協働体制が必要である。学級担任だけでなく、教員同士が情報交換をし、チームとして支援していくことが大切である。学校や家庭、地域社会との連携を必要とするときもあれば、専門機関との連携を必要とする場合もある。目の前の子どもたちをしっかりと見つめ、何が一番子どもたちのためになるのかを考え、情報交換だけではなく行動連携につながる協働体制を組んでいく必要がある。

5 専門性を生かした連携と協働

児童生徒と直接かかわる学級担任と養護教諭、スクールカウンセラーのそれぞれが専門性を生かし、協働体制を組み、予防的・開発的・問題解決的な心理教育的援助を進めてきた。児童生徒をいろいろな角度から見ることで、また、連携をとり、チームとして援助の方法を探ることによって、多面的なアプローチも可能となる。あるゆる角度から生徒を観察し理解することは教育課題を解決するためにも重要なことであり、それぞれの専門性を生かした連携と協働を学校カウンセリングとして進めていく。

6 個人の資質向上とチーム援助

学校における教育相談体制の構築はもとより、一人一人に対して何が必要な援助であるかを、スクールカウンセラーや教員が連携しながらチームとして思考しなければならない。個と集団に応じたきめ細かな心理教育的援助こそ、学校カウンセリングの中核である。より効果的なコラボレーションを考えると、教員間の連絡調整を密にする必要がある。そのためにも、コーディネーターは、必要な人に必要な情報が効果的に伝わるような、効率的な情報発信の方法を考えていかなければならない。さらに、生徒の出すサインを見逃さないように、個人を見つめる姿勢を全教職員が磨いていかなければならない。そのためにも、事例検討会を含めた教職員研修を計画的に実施するなど教職員個人の資質も向上させつつ、学校カウンセリングを進めていきたいと考える。

7 チーム援助を進める学級担任の役割

学級担任が個人面談を進めるとき、一人一人のもつ力を最大限に伸ばす「援助者」としてのかかわりが必要である。また、学級においても児童生徒の社会性を高めることを目標にした援助活動が必要である。本研究においては、面談によって得た個人のもつ問題をもとに、学級担任が周囲に援助を求めたことにより、効果的なチーム援助が可能となった。教員同士の情報交換がスムーズに進めば、児童生徒に対して効果的な援助ができる。チーム援助を実現するためには、学級担任は「調整係」という立場を認識し、問題を一人で抱え込まずに人的援助を適切に求める必要がある。

8 学校カウンセリングでライフスキルの育成

児童生徒の心理的な発達を促進し、社会生活に必要なライフスキルを育て、困難な問題に対処する力やストレス耐性を高める心理教育的援助としての学校カウンセリングを進めてきた。

WHO（世界保健機関）は、どの時代、どの文化社会においても、人間として生きていくために必要な力があるとし、それを「ライフスキル」と定義した。以下が、その10項目である。

- ① 意思決定 (Decision making)
- ② 問題解決 (Problem solving)
- ③ 創造的思考 (Creative thinking)
- ④ 批判的思考 (Critical thinking)
- ⑤ 効果的コミュニケーション (Effective communication)
- ⑥ 対人関係スキル (Interpersonal relationship skills)
- ⑦ 自己認識 (Self-awareness)
- ⑧ 共感性 (Empathy)
- ⑨ 情動への対処 (Coping with emotions)
- ⑩ ストレス・コントロール (Coping with stress)

本研究では、学校カウンセリングを進めることにより、個々人のライフスキルを高め、集団を育てる心理教育的援助を思考してきた。学校カウンセリングは、児童生徒の学習効果をあげるために必要な教員による援助である。今後においても、児童生徒が学校という場において、より豊かな人間関係を構築し、自らの目標達成に向けて意欲的に生活していけるように援助していきたいと考える。

参考・引用文献

- (1) 相川充 津村俊充 (著)「社会的スキルと対人関係」誠心書房 1996
- (2) 石隈利紀 (著)「学校心理学」誠心書房 1999
- (3) 鶴養美昭 (著)「心理臨床大事典1114p 学校教育と心理臨床」培風館 1992
- (4) 岡堂哲雄 (著)「小児ケアのための発達臨床心理」へるす出版 1983
- (5) 岡林春雄 (著)「心理教育Psychoeducation」金子書房 1997
- (6) 河合隼雄 鷺田清一 (著)「臨床とことば」TBSブリタニカ 2003
- (7) 河合隼雄 (著)「カウンセリング講座」創元社 2000
- (8) 河合隼雄 (著)「臨床教育学入門」岩波書店 1995
- (9) 月刊学校教育相談 (編)「相談活動に生かせる15の心理技法」ほんの森出版 2004
- (10) 栗原慎二 (著)「新しい学校教育相談の在り方と進め方」ほんの森出版 2002
- (11) 國分康孝 (監)「エンカウンターで学級が変わるショートエクササイズ集」図書文化 1999
- (12) 國分康孝 (監)「エンカウンターで学級が変わるショートエクササイズ集part2」図書文化 2001
- (13) 國分康孝 (編)「学校カウンセリング」日本評論社 1999
- (14) 佐藤修策 (監)「学校カウンセリングの理論と実践」ナカニシヤ出版 2007
- (15) 平木典子 (著)「アサーション・トレーニング」日本精神技術研究所 1993
- (16) 諸富祥彦 (監)「自己表現ワークシート」図書文化 2005
- (17) 文部省 (編)「生徒指導の手引き」1965
- (18) 文部省 (編)「中学校におけるカウンセリングの進め方」1972
- (19) 文部省 (編)「学校における教育相談の考え方・進め方」1990
- (20) 文部科学省 (編)「在外教育施設安全対策資料 (スクールカウンセリング)」2003

2008年3月

研究プロジェクト

学校カウンセリングの進め方

－児童生徒の発達段階に応じた効果的なカウンセリングの実践的研究－

奈良県教育委員会指定研究員

下市町立阿知賀小学校	教	諭	熊 谷 啓 子
斑鳩町立斑鳩中学校	養 護 教	諭	藤 嶋 祥 子
県立五條高等学校	教	諭	生 野 悦 子

奈良県立教育研究所 生活・進路相談部

生活・進路相談部	部	長	堀 岡 克 匡
教育相談係	係	長	山 本 健 治
教育相談係	指 導 主 事		森 下 道 男
教育相談係	指 導 主 事		森 本 昭 博
教育相談係	指 導 主 事		橋 本 宗 和